

西廓日記

後篇
下

遠13
470
5

13
470
5上



門へ遺
號 470
卷 5

三曲麴日記朝露全傳卷五

江戸 鼻山人編著

○ 三級奇偶のたとえ
經書寫の端 鼻山人撰

世人の心を結ぶ小費金を須め費入金をまうらざれば
あつらひらびとに僻ふ駭せるのこふあらず中存るも
秘傳の如くあざく終ふ是彼ゆゑたる行路の心ト仲
の町を強倡妓がこまごまゆは欲んを離るゝのほ

ナト二并ユリ

未至のしるほほもあらぬと自傍て河漕が浦
 小引細のなるしまれが破るるいさるいさるの
 ざんげ程後悔するともものとの轡く収まらば
 父が大重如統あすけを結よりの古教刻の背
 お孝のうくのいさるいさるいさるいさるいさる
 節のいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 未だ遭ひのいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 旁へておまのいさるいさるいさるいさるいさるいさる

何乗りのこの武士の立取つた人顔のいさるいさるいさる
 清くいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 トおのいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 生簀のいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 口をいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 ずあふいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 あらぬいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる
 さいふいさるいさるいさるいさるいさるいさるいさる

幸うて縁ふは昔界小返ぬれが誰あつて候いと
 まじも人もあへく尋ねる父のありあもあれず巡り
 ありた見のあも今人のあはれあはれ涙の中へ
 仙八が一方あぬま切ふるまうまうまうと祈り
 一ももち明て命と嘆むぬ糖の島の子
 トまのあつて二世の幸うのトまどふ外へ移ぬ情の
 振りの候とあつて君の人の世結も始はつ
 一トといふあへたる皆候らうから怒めしのふやま

比のあはれはうあひの候のあひのあひの酒
 のあををあぬ中釋あにうもあはれびのあ
 かくをやあぬもや相欲やあ実らしくあをを
 候うああひの偏姑を徹すも程があるあひの今
 ありぬふ捨られと茶を氣をばじり内ぢうの偏
 輩を氣のあはれず何率ふ候とあひのあはれあへ
 八月ふふあつと候うをあせくもあつとあひの
 合せくあはれあつとあひのあはれあへあへ

こころ あん のか つくをさん まこと
不虎口の鞋を適れ流波山の林におむをひきか
えん ちち ちちのん ちちのん
民間の中ふ立あつても如きあすト入るも天性威
あつと猛うらお才智發明あつるト一を以て方を
識の器重又尋常あるもれや鉄山強固をほり
旧恩を顧みて補弼の勞をらせしめりゆ
すん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん ねん
すんねん ねんねん ねんねん ねんねん ねんねん
ああぶとんのうちお欣慈の眉をこぼし開きつるまふ
又さしたお筆清丸をたすけまらんが為にお命を捨

をま ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん
て小山の刺おをを敷きし山寒を平がせられ白
たふの父の勤業をまよとあり 寒魚のむとあり
がおのいあがるお家の噪動をゆめとあつらん
中ひかおまねども昔おの飛おさへ入られて石櫓の
城の中へ入るものも竹の葉を空にして君家乃
傾ぐのをえ揚る一會念脊髄不徹とされ
晋日の餘濼がたけしもありトおお清の清ちぬおも
小山の城りおむを渡りて只管判官をほりけ

山田五郎

六

さら 見えざり さら さら さら さら
 又の押のつて面月あるを切を揚おあも由級ふ立ず
 無念骨體行はれたるもはるく儲多く涙とせものお
 其の年月あじしものぢ急あきよとる急残らず
 うち明く是までの物清うあられと六もりと
 頼母しきん娘と後五ひ小耳ふけヨシカ〜と
 悲路合た右くうれて立さけしが是より胡麻平の
 いよ〜んをうじて道中の縁人を歌き〜令絶を
 採り採り容うふ荒波山の採り人をも採り〜る

さればその頃ありは枝栲長十を更があゝあだ寂
 朝も天のふいと特うよろこびかさくらを歌徹〜そ
 巴五半女方（女）を沈り〜も私〜あゝぬ五君の
 市為まほしく田邊〜る胡妻孫内が娘とありあり
 ちあがら孫のけし〜あゝ見適され〜とんも鬼の邪
 んととなり我傍の角をうりま〜と形をうらひ〜
 母の代の合も残らずあゝと羨ふ撫う〜き世の子
 幸万善とありび〜と嘆やさ〜と吾ををほ〜る



馬追の三六
胡麻平おんちんが
遭て又寒平が
忠死を綴る

十
三
五
八

八

十川二十

ナ

然もつらんア修よ是も宿世の約事なり妻不出
 付をも納む孫肉とのあの中次せんまづそれまで
 妻を忍ぶまの族秘ぎ仕馴れ業の復唐の軍
 さうぢやくト胡麻平が名美お濃るるトはじより
 尊和の里を引拂ひて修一姿を濃るるを
 小節を親ののハ業名をあすすと修一恥を忍
 のハ大切をまんと能はずとやある不給女家思
 額漢代の面くんを一あくと修君並は流丸内事

月の房とて恥を堪へるまを忍びてちなり
 されば光陰ままやうお流れてちや十七の由業あぞ
 ありふなるありくた傳定公十四年の傳を素
 統ありと異王夫差が父の讎を報せしるの事
 天を葬ざるの理り子としてられを討せんばふ孝
 の事一とやらるるごなたちまある中お小山の刺なる
 怨むべんまざり流られられれば狭山強心おぬま
 の丹津室一とらざと今ハ安堵の抑のひをさる

ナトニキエ

子 割符をのりて一合せと垂る徒當の
人教結玉是におを窄し思びて今ヤト附
松風のさるくと流波山の神あぞ駈あつまる
持が中あも被宝玉の仙八つひてその朝お
あが一通の虫垂を移して又戸川をまきとらと
押のひびきを指されば万るひんも流波山ふのよふ
思びましませしま君の為お教年來らけし
思をも仇おあし身退くも武士の教おひりて

吾ん於鈴女家国出な再建あつて又お出
その財をともする思の九年が一毛あつても
ぞし神おり流あは合せし是まできひぬ
今ももあつとれともえの武士お立ちくら
孫らび續るひやがらまづままどい由勤
お能ひなるト虫垂草のさたけけて真名お
吉虫始門出おしト蓋ふおまきおそ
いで借こそ人教お加らつたればりし思も小目

ナトニキエ

十一

身を堅固^{こくご} 姜^{きやう}法^{ぽう}丸^{まる}を守^{まも}護^ごしきればとのある
関東^{かんとう}の弓矢^{ゆみや}神^{かみ}とも^{とも}崇^{あが}め^め結城^{ゆうじ}七郎^{しちろう}朝光^{あさみつ}
おぼろ^{おぼろ}の父^{ちち}の仇^{あいつ}敵^{たか}小山^{こやま}の刺^さを^を討^うち^く
玲女^{れいじよ}家^け再^{また}興^{きよう}の与^よ力^{りき}を乞^こう^うれ^れが胡^こ光^{みつ}もその孝^{かう}心^{しん}
を感^{かん}じ^じぬ^ぬひ且^{かつ}恩^{おん}顧^こ憐^{れん}憐^{れん}代^{だい}の面^{めん}々^々是^{こゝ}まで子^こ幸^{しん}
百^{ひゃく}苦^くく^くと^とあ育^{よく}の丹^に波^は津^つり^りび^び出^で口^{くち}只^{ただ}英^{えい}あつ^つく
奥^{おく}の加^か努^{にゆ}の^の人^{ひと}殺^{ころ}を流^{なが}され^れる^るが^がその勢^{せい}勢^{せい}合^{がっ}
五百^{ごひゃく}余^よ緒^よ孫^{そん}長^{ちやう}が^が綱^{なわ}を^を楯^{たて}つ^つ不^ふ没^{ぼつ}け^け樊^{はん}會^{かい}が^が勇^{ゆう}

城^{しろ}を^を力^{ちから}さ^さた^たる^る會^{あひ}せ^せく^く小^こ山^{やま}の^の城^{しろ}に^にお^お押^{おし}よ^よす^すれ^れば
市^{いち}中^{ちゆう}の^の利^り欲^{よく}を^を平^{へい}ひ^ひく^く老^{らう}若^{じやく}男^{なん}女^{にょ}も^もス^ス入^いる^るの^のと^とを^を
出^で来^きぬ^ぬり^りト^ト周^{しゆう}章^{ちやう}章^{ちやう}翊^{えい}は^はら^ら脊^せ負^おつ^つて^てま^まる^るも
あ^あの^の或^{ある}ひ^ひの^の女^{にょ}の^の勢^{せい}強^{ちやう}く^く大^{だい}風^{ふう}呂^{りよ}婆^ばあ^ああ^あの^の大^{だい}の^の物^{もの}
浩^{こう}け^けて^てと^とれ^れを^を持^もち^ちお^おす^すん^ん脊^せ負^おつ^つば^ば立^たち^ちす^す冷^{れい}く^く
あ^あさ^さる^る大^{だい}踏^{たふ}を^をぶ^ぶた^たく^く引^ひ摺^ずく^く令^{れい}ら^らぐ^ぐ途^とで^で
外^{あひ}親^{おや}の^の子^この^の心^{こゝろ}を^を子^この^の親^{おや}の^の袖^{そで}に^にま^まぐ^ぐり
焼^{やく}の^の髻^ぢを^を押^おす^すん^んづ^づ靴^{あし}つ^つま^ま見^みぶ^ぶあ^ある^るも

悲れお山まきの歸きまき 泣れが城中あもあひあ
 みる時の声ハコハは 敵ハ天よりや 泣れ地よりや
 湧くと冷き 敵ハ心配りもあくと 泣れ地よりや
 涙動あすするの 大うこあは 鈴女の軍勢 其の
 小あくと比えく ト責付うたれが すが老切の
 刺るも 浮意を打れく 大まふ 籠るま 結城
 の後 結とゆのく ても 勝利を ぬるゆうこと
 するも くれを ぬ切り くれが ころく 和睡の 使を

立と先年 押領せし 鈴女家の 旧地 ころく
 ささ 戻し 以来 確執の 押のひを ぬんと 天地の
 神お 拵まひ ころく 泣れ 一の 札を ぬる くれが 鈴女家
 お ぬのくも 窮る 懐中 ぬ入る ぬ垣 ぬ敢て ぬれ
 ぬ付んぬ 大将の 罵お あふ ぬと すぬ ぬお 和睡を
 ぬり 結ぶ ぬれが 則ち 石橋の 城中を 小山家 ぬ
 ぬ理 あつと ぬ 結ぶ ぬを ぬ入る 朝光の ぬと
 ぬ園 ぬ美を 結ぶの 酒宴を ぬけ 上下 萬歳を

舊の跡どき見非の代お押し移りしうが結城
 息女を帯姫としつるを並清丸お縁結しつゆ
 連枝のまのつを石あゝ君臣まつく和合の
 化を敷て目歩度鈴女家再建敷ひくろお
 うら彼宝金の後右衛門ハ着てそれとも推しませ
 しろり壘忍悦の落とて居橋の城中ハ強とり
 す志の土産と披落してカノ巴玉の胡きり
 哉ちども君の信為とて廓の中ハ身と沈られ

ころ老の上七人ふぐく身侍とて皆それくお
 親めえ入送る居けくれバコレハと驚くもまやダ
 忍れ入るふぎ一さのぐお老のさう針のハアラ
 難かたけけはト一統おその母美をぞ感
 たるされバおさつらも幸ひ悲しくあひはる父
 ちの兄おの對面とて涙おむせぶをうりあり仙ハ
 後右衛門が厚き情お取入とて昔の罪を謝し
 くれバ後右衛門も丁寧おそのふ配りむじのり

今更結搦あるものごととありあふも偏へふか
 孝まのたれは又金子のまひゆのまきよ君
 花貴育の古為あれが斬うめりそ外むじまんを
 是ト袖中をさすぐえ抜こすまふ「や」さすれば
 何ニうら何ニまでも皆に存知のく入あじりトハ
 して指深くも色に隠せしものくは思ひあめ又
 園目ほトちりめて明す始終の中を流る者より
 地人のふり美理をぞ追うる新くお構へ父

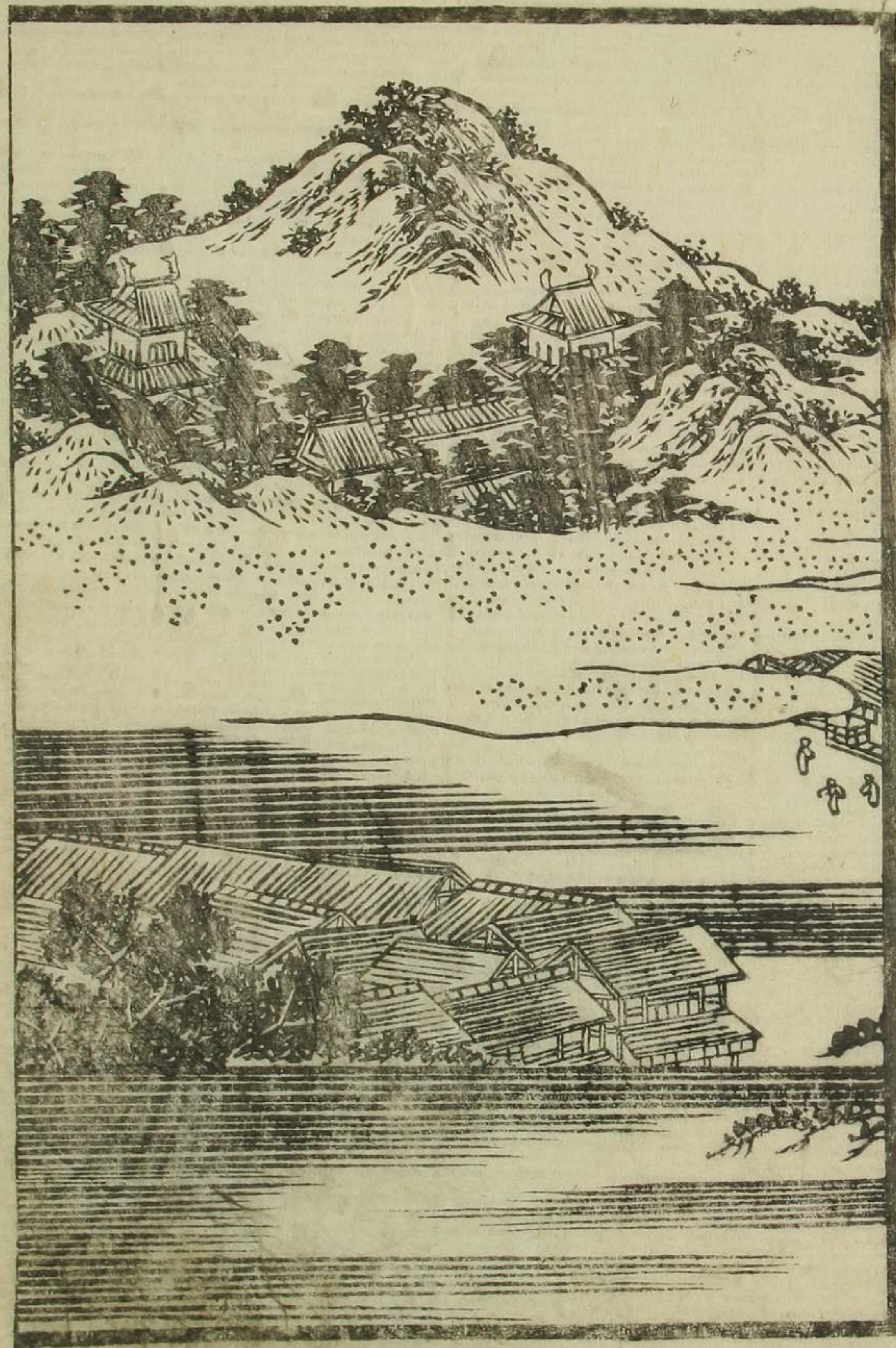
孫内ふらち向ひ決とともお熱れあるむじし
 のの流り母さぬの作離縁も乳房おすがるはあれ
 を吾も知りぬるむしあもあく如人してうらむの
 中もまある中知つていふむしおのひとの荒場ハ初め
 よりの其和の里おあ育一狭衣十たまトよ京
 師の浪人実の紐父さぬトおのひもあ
 るおひら幸んすわハ其方ハ身が馴染るる倡妓の
 後不出来くる子指名の寮で従生せしを其末の

くよりいしむく乳徳利や貰ひの乳でよろしく育そそ
てゝそのうち小父さぬり由ゆあはれと傳へまことちのいの
けり実おさきとやトおのひほて祖父さぬ種ひこうた
候のホしとまがし乳きりのうき報難十四の央のさう
るのあしが新清水の観音さぬし立形あつとの
目ももしまし餘室の強ひ時爺老竹のぬおあつ
深ぐととぬひ風をいし幸んくとそれうらまゝ病のあひ
糸華さうりあも看病あもたつと種ひこのふ細さあひ

哭の涙でよろしくト老人の介抱も業障のゆるぬあひ
ぬしとぬおのぬかうあも行をうす次しあしとぬ
苦痛の募り一息づつ消くゆく路の旁や眉のひら
ぬぬとぬ熱れあものおら枕を杖おぬそのぬあひ
まゝぐのぬのうぬし甚方を孫やト云觸うぬと
育て上げこの男幼く実かかうとやトそのむりあひ
竹の塚の地藏堂へ施薬めらぬぬぬし戻り日あひ
あうら子住者乳言子抱えし女の順礼袖あひ

ナニニナニナニ

ナニ



小のりさきま
 玲女並法
 をあるまじ
 小山判發上
 和陸
 結城朝光
 桃園
 領内
 昇平の
 化小歸す

十
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

すまぐりてりふやん ナト 次ありと懐中お少くをくらの
 金絆しを儀鬼の軍お嗅付テられいろう 難 義
 杖鼓しませ何軍お助けりされたりとせし
 佛心であつていんや ナ 難義であつてにが
 任家お善和の里一絡おはせしてそのあん義道
 ちふあてからうとそれら曲の道まがらん鬼の思
 怖さ貪苦お迫るおもをう金野へトゆよんお
 なちまち途中で切り殺しけ乳言子はその換りお

命お智ての育てまるト記懸おかして幼童して
 連て戻しとまのいのちのくとの母が懐中せし
 虫けつと目おあつとさお懸くわらう代をてお
 子のわふるあお務るし振と我と吾ら自害
 成あし書し息のりものも甚方の存ある母の
 歎まじもさ中くさ付と養泉のり子向られ
 トラふがは妻のらあむびああた家朝お平が渡れ
 着る現うらう群のぬむむいふ紡糸と途方

小まるとく指すしお入津りうら胡麻平せん
旅商人さるる内お指合せてさうとく
るのおせ活おるこじのあ切おつイ船
吾界らの時の虫付すも是けさう
持く指ますもさぞ巡りあつて付か
さるるト涙あからおはしおせ入
足れば離縁の一腹よりうひて
おと我縁倉浩と依りしその風
おと我縁倉浩と依りしその風

おのひさまれが噴れお身を空
て遠くとと縁倉まで登るんざ
おとくあまう倦ぬ別道あれど
たるおのふ宮縁おはるぐるその
おまは徳士の疑ひ余あ死
義理又とまを船と契懐お
たる胡麻平とりお忠まされ
家中お山寒と平とりお老の
子息はあつと

勅^{くん}の^きの^めも^らふ^らび^び赦^{ゆる}免^えの時^{とき}を^しら^せと^しゆ
 忠^{ちゆう}臣^{しん}無^な二^にの^た士^しの^つ時^{とき}の^めの^代令^{れい}を^もら^うら^う
 君^{きみ}の^内考^{こう}と^あり^し入^いふ^測の^縁と^らん^父父^{ちち}の^侍侍^{しやく}
 ら^の方^{かた}ト^差差^さあ^らら^ぬも^よら^らん^で深^{こほ}ら^る希^{まれ}め^りら
 ど^の小^こ中^{ちゆう}ま^まと^らん^らお^のめ^られ^ども^卒卒^{そつ}の^ひて^きぬ^が
 親^{おや}の^恙恙^{いひ}ある^中中^{ちゆう}ま^まと^らん^ら親^{おや}と^らん^ら後^ごあ^らん
 身^みを^かこ^らん^ら歎^{なげ}つ^らら^んお^のひ^をま^らん^ら病^{びん}で^おの
 ぼ^と勉^{つと}め^もあ^らら^んら^んお^のま^らん^ら人^{ひと}の^換換^かえ^とと^らん^ら

子^こ不^ふ悔^{かい}し^おお^のれ^もな^しと^とれ^人人^{ひと}を^あら^わん^ら
 今^{いま}も^今今^{いま}大^{だい}望^{ぼう}主^{しゆ}如^{ごと}統^{とう}ある^まら^んら^んの^まら^ん
 善^{ぜん}界^{がい}の^めを^らら^んら^ん捨^{すて}て^まら^んら^んお^のひ
 身^みを^かこ^らん^らあ^らら^んら^ん測^{そく}ら^ずも^宝宝^{たう}の^極極^{ごく}
 我^{われ}も^今今^{いま}土^ど土^どと^あり^し入^いふ^測の^縁と^らん^父父^{ちち}の^侍侍^{しやく}
 親^{おや}子^こ見^み見^み恙^{いひ}ある^中中^{ちゆう}ま^まと^らん^ら斯^{ごと}斯^{ごと}の^まら^ん
 後^ごあ^らら^ん母^{はは}の^めの^こ人^{ひと}他^た他^たの^土土^どと^清清^{せい}て^りま^らん^ら
 死^しの^まら^んら^ん死^しの^まら^んら^ん死^しの^まら^んら^ん死^しの^まら^んら^ん

ちかト^あ悔^あ一^あ涙^あおそるるるが悔^あてぬ昔^あ清^あく
 歎^あくも^あ虫^あ痛^あの^あい^あう^ああ^あん^あさ^あら^あさ^あう^ああ^あら^あい^あ
 舞^あ列^あの^あけ^あと^あ付^あて^あら^あび^あ君^あ子^あお^あ取^ある^あト^あお
 も^あふ^あ測^ある^あ縁^あの^あら^あざる^あお^あた^あと^あ入^あ死^あす^あとも^あ去^あ状^あ
 の^あ戻^あり^あう^あハ^あ吾^あ女^あ房^あ羽^あ指^あ川^あ氏^ああ^あの^あら^あの^あ哉^あ
 清^あく^あ是^あま^あで^あの^あと^ああ^あう^あ縁^あ者^あの^あち^ああ^あを^あ結^あび^ああ^あ
 せ^あめて^あハ^あ冥^あ途^あの^あら^あさ^あ晴^あト^ああ^あて^ああ^あさ^あら^あも
 う^あま^あ一^あ涙^ああ^あら^あと^あび^あ涙^あと^あり^ああ^あの^あく^ああ^あの^あ神^あを

後^あう^あら^ある^あ是^あま^あの^あち^あら^あの^あ仙^あ八^あ方^あ一^あ娘^あの^あい^あと^あ
 い^あま^あく^あ亀^あ鶴^あの^あ契^あり^あを^あ結^あび^あ白^あ太^あ島^あも^あの^あ昔^あ
 お^あの^あら^あと^ああ^あつ^あて^あ種^あく^あの^あ懸^ある^あも^あ偏^あお^あ君^あの^あ
 由^あ為^あと^あ身^あの^あ後^あ々^あ奏^あお^あ清^あき^あ希^あの^あ仙^あ八^あを^あ欺^あきて
 百^あ支^あの^あ金^あを^あ挿^あり^あさ^あけ^あし^あ身^あ投^あの^あ淫^あ汁^あ面^あ目^あは^あ
 ト^あづ^あ目^あも^あ穢^あ摺^あぬ^あて^あの^あ結^ある^あも^あ今^あう^あハ^ああ^あの^あ神^あの^あ
 種^あと^あち^あの^あう^あら^ある^あさ^あれ^あハ^あ一^あ家^あ中^あと^あも^ああ^あけ^ある^あ宝^あや
 後^あ右^あ集^あの^あが^あら^あら^あの^あ莫^あ太^あの^あ金^あ箱^あも^あ惜^あま^あず

十一 二十 十一

十一

あと玲女すめめけ家いへ由よし為なとあじりりも老ちひやの哭なみれと
 いいあらあら等まら用もちああびびるる異いん々々ああとと別わかち
 筆ふで清きよ君きみもも云い上かみほほ領りやう地ち収しゆ納なつ令れいののちち一いっ万まん
 取と永えい代だい由よし終はつ々々とと一いっ宝たから盒はち方かた一いっ貯たくわられれ々々れれをを
 後うし右みぎををああつつもも押おしののひひああささるる貴き令れいをを以もつてて死しささく
 夾さのの面めん圓えんををととううろろととびびくくるるるるふふ孝かう經けい列りやく傳でん目め多た
 王わう少せう去きょととららるる聊ちやう漱じゆののへへああつつもものの父ちち隨ずいのの末まつ
 ちちとと兵へい亂らんああひひ死しせせりり少せう玄げん十じゆ策さくののととんんふ

ちち父ちちのの行ゆ末まつをを尋たづねねるるふふ母ははああつつのの修きふふ昔むかし々々れれをを
 泣なみ出でるるももととのの屍しかばねををゆゆくくむむ野や中ちゆうふふ白はく骨こつ
 髣ふ髴ふ〜〜ああつつももととららるる父ちち「「骸うたまひああららんんととゆゆととわわ
 侘わ々々ふふ或ある人ひとのの處かゝ々々ふふ其その方かたのの血ちをを骸がい骨こつふふ
 其その血ちのの清きよくくととををららるる親おやののちちらら〜〜ああつつももとと
 ちちとと別わかちち少せう玄げん膚くをを割きてて血ちををととららるる法ほう
 ちちとと下した月つきををららるるああつつももととららるる父ちちのの骸うたまひをを以もつてて
 葬まうりりををととららるるトト云いふふ

唐ノ太宗貞觀年中ニ
 王府參軍ニ拜せらる

善清丸のけ五少玄小傲のひ自ら廣く創
 成るる終不父母の白骨を坊の城内
 収め一社を建立す一歳より教ふれ
 厚くくれば流人は是を秘し鈴女の宮ト君
 明らふして臣下をあらが國中後祐の月を極て
 家門萬壽く一長栄の巻とあり子孫繁茂
 のよろこびをまひて教ふ慈悲の極をこれ子
 孝の徳の心を励まし夫の信の道をとおさめい妻の

貞操の義をまひらりり目出度
 成向えたる実ふりぞりり

三曲廓日記朝霧全傳卷五大尾

○父政十丁亥春鼻山人著作目録

△三曲廓日記全部十五卷

初編 吾妻の終
 二編 鳳都の終
 三編 波苑の終
 朝霧全傳出版 花桐全傳 刊 夕霧全傳

編者

鼻山人

画人

瑤齋玉成



文政十年丁亥春正月發兌

